道德獨特の實現方法

西晋一郎

一

自由は本と所與的限定に對して考へられることで、與へられた限定を更に限定する作用らきの上に自由の意識が起る。此更に限定する作用は以前の限定を超越する所がある、而して以前の與へられた限定とは感性的の形に於ての限定である故右の超越は感性的を超越することである。しかし感性的限定との折衝の上に起る自由の意識は其自身或る感性的なものを含んでをる。從て超感性的の意識は必然感性的意識を其要素として有つてをる。而してこのことは自由の意識が自然界との交渉の上に起ることを意味する。然るに自由にも程度がある。一切の限定を全然超越すること卽ち一切限定の一切否定は完全なる自由の消極的一面であらうが、かゝる無限定態は意識以前である。但し是が無量の限定の可能態であつて宗教道德藝術等自由界に屬するものは此所を其共通界とする。此超越卽否定の程度によつ

て自由にも程度がある。道德的自由といふは法の意識に於て覺えられる自由である。感性的の形に於ける限定卽ち自然的限定を更に限定するに當つて此後の限定が只任意勝手に行はれないで自由を以て構へた目的概念によつて行はれるのであるが、自由なる目的概念といふは或る客觀的意義から出るものである。此客觀的意義は一面夫の自然的限定を更に限定する直接的原理であるから具躰的には其時其場に於て某の自然的生活との交渉として現はれる意識であり、他の一面其客觀的意義たるの故を以て法卽ち一般的の法則として考へられる。カントの實踐的理性批判の如きは此後者の方面を考察して前者の方面は其が自然的生活(此所では主として欲求衝動の生活)と干係する故を以て故らに論外に措いた、これ其倫理說が道德的生活の內容を示さない理由であり、同時に其所謂道德法の意識(其は卽ち又自由の意識)が何にか超感性的のものであるかのやうに聞える理由である。しかし客觀的意識の此一般的の方面も夫の特殊的の方面も具躰的には不可分であるから一般的法則の意識の根柢には自然的限定との折衝から起る感性的意識が動いて居らねばならぬ理である。又そうであつて道德法の意識が只の抽象的思想でなくして自由なる具躰的活動を起す原理たり得るのである。法の意識は斯く具躰的であるが其法

の意識たるに於て之を意識するものと共々に法を意識する卽ち法を奉ずる伴侶卽ち其法の下には平等であるべき自他の實在を含んでをる。それで法卽ち一般的法則たる意識を得るのである。此法の意識と自由の意識は同じであるから此意識を有つものを此處に理性者と稱する。從て右の自他伴侶は理性者同志である、自由者の一團である。故に法を意識することは自ら理性者たるを識るのと自己と同等たる他の理性者を認めるとの兩事を含んでをる、否理性者たることは單獨には出來ぬ、他の自由者を認めるによつて自ら自由者たるを覺える、是れ實に法の意識である。故にカントの揭げた道德法の第一方式たる「一般的法則に遵つて意志する」ことゝ其第二方式たる「如何なる人に就いても人格は目的そのものとして遇すべし」といふことは全然同じいので、法の意識に先つて人格の認知があるのではない。法の意識以前には自ら人格でもなければ他を人格と見ることもない、實に他を人格視するその作用によつて自ら人格となるのである。人格は故に客觀的であつて、精神的團躰に屬するものとしてのみ成立する、單獨なる人格といふものは無い。此人格の意識卽ち法の意識を有つを道德的自覺とする。故に「外來人にも內地人にも法は一なり」と覺えて此法の主たる神を信じたるは右の意味に於て全く道德的自覺である、此所に

人間性（メンシュハイト）を識るのである。人格の精髓は人間性である。道德の本質は人間性にあるので普通に道德を人と人との關係とか、社會的とか言ふ所以である道德卽人倫である。しかし人と人との干係とか人倫とか云ふときは或る特殊的のものが這入つて來るので、此に於て法の意識の特殊の方面が現はれる。カントの如くに法の意識に就て其普遍の方面のみを主眼とするときは人間の道德的平等の方にのみ意が注がれて、所謂目的そのものとして遇せらるべき人格は孤立的一個人に具はるかの觀を呈する。（實にカントの倫理說は往々個人主義的のものと見られて、たとへばヘーゲルの普遍主義と對照せしめられてをる。其實はヘーゲルのが所謂普遍主義でもなければカントのが所謂個人主義でもないのである。）そうなれば法の意識は其本來の具躰性を失つて抽象に墮する。

然るに法の意識の普遍性の方面は具躰的には其特殊性の方面と一躰であつて、それで實は普遍も普遍たり得特殊も特殊たり得る。法の意識として現はれる客觀的意義が具躰的に直接的に所與自然的限定を統一して後者を轉じて或は後者の上に自由の自己限定を實現するとき夫の特殊性が現はれる。元來客觀的意義といふのは所與的限定を更に限定する裡に含まれをる超越作用者、卽ち自由を實にする主觀、

此主觀に對して面を更へて現はれ來る客觀の事である。但自由主觀に對する客觀であるが故に與へられた限定としてゞなく、當に限定の原理たるべき者として、自由主觀に要求せられる意義としてゞある。固より此の意義は抽象的概念では無く、特殊の所與的限定を更に某の特殊の樣に限定すべき特殊の目的認識を創造する具體的普遍である。且つ此意義は所與的卽ち自然的限定を統一すべきものであるから其深い根柢に於て自然界と相應一致するものでなければならぬ、語を換へて言へば此意義は其が自然を限定するに際して限定せられんとする自然そのものゝ本來の目的の認知として現はれねばならぬ。こゝに自然そのものゝ本來の目的の認識といふは決して普通の自然的認識の事では無い。後者は單に自然を自然たらしめるものである。本來の目的の認識は自然を成立せしめる根本的意義に入ることによつて始て得らるべき認識である。而して此自然成立の根本的意義こそ夫の自由主觀に對して其實現を要求する客觀的意義のことである、卽ち此意義と夫の目的認識とは互に相循環してをるのである。それ故に又此意義が自然の深い根柢と相應一致し、從て能く自然的限定を更に限定することの出來る性質のものたるを知るのである。自然を成立せしめる自然的認識に於ては此意義は右認識の先驗的規範卽ち

從來本具觀念とも稱したものとして作用らき、此自然卽自然的限定を更に限定する自由主觀に對して始めて其本來の意義を發して此後者たる限定の直接的原理として作用らく。このとき此意義は卽ち道德的價値であつて其限定が卽ち道德の實現である。尙ほ此所で知られることは一般に先驗的規範或は價値といひ又は理念(イデー)といつてをるものは結局經驗的限定を更に限定統一する際に於て某の特殊的意識として現はれて來らねばならぬ、卽ち感性的直觀を其要素として有つ意識に發展せねばならぬ、さなくば經驗的限定と交涉して能く後者を道德的限定卽ち生活にまで實現せしめることが出來ぬ。理念又は先驗的價値が若し此意識の具體的事實と直接的連貫を失なつたならば經驗界或は道德界の構成に現實的に作用らく原理たるを得ないで、只一種の說明根據となり了る、又實に左樣に考へてをるものもある。しかし理念が現實意識の全然彼方にあるものならば意識成立の原理たり得るわけがない。意識成立の其時に早や現實意識界に其端を見せてをるのである。先驗的といふは經驗を俟つて始めて存するのでなく經驗成立の根柢といふのであつて、其成立の際には卽ちはつきりした具體的意識事實として現はれる、さもなければ何を以て價値となし理念と言ふを得べきか。只此者は一々特殊の意識に於て其內容を擧げ

て現はさぬもので、謂はゞ無量の特殊を出す普遍である、其普遍の邊と其場合々々に於ける特殊の邊とが具體的一である、かゝる活きた原理でなければならぬ。事實に先つ價値といふことも此意味に外ならぬ。理念の世界に入るといふは感性的生活が其自身の本來を深く知るといふことゝ個々特殊の裡に其まゝ永く流らぬ或るものを會得するといふことに外ならぬ。

右の如く見て道德法の意識卽ち道德的自覺が、一面普遍的法則を見て其下に平等の人格卽人間性を識り、一面其人格の內容が皆悉く特殊であつて精神的團體を成すの原理となるのである。道德的自覺は自然的限定を更に統一して最も具體的なる限定を實にするに於て藝術と道德の相違を見、此自覺が特殊的內容を發展する人格の相關によつて精神的社會を成すに於て宗敎と道德の相違を見る。特に宗敎に比して道德獨特の實現方法は人格の相關によるにある。職分或は分を知るのが道德的自覺で此所から自由界に入るに比して、宗敎的自覺は職分を通して達することを必然としない、如何なる意識統一の段階に於ても又如何なる意識內容に於ても其所で直ちに達することの出來るものである。

二

所與的限定を更に限定することの中には前者を超越することが含まれてをる、此超越作用の中には否定作用が含まれてをる。此作用によつて所與的限定が自己限定となる、卽ち自己といふべきものが實にせられる。元來意識の內容は客觀的のものである。知覺と動作とが分れずに全く一つである生活にあつては生活は自然現象その儘であつて主觀客觀の分ちがないから、知覺動作一體の內容も所與的限定ではない。表象作用が起るようになれば客觀の側が所與的限定卽ち對象として主觀に對立して來る。先の未分の一體といふものも嚴密に見れば矢張り主客の對立はあるので、さもなければすべて何等の現象もない。只主觀の反省の度が高まればそれだけ客觀と獨立する、それが客觀的對象の出現であつて、卽ち一種の投射である。故に意識は性來自意識であつて、それだけ自由を得るのである。けれどこれだけの反省では單に主客が明らさまに對立したに過ぎぬので、此對立の裏に必然作用らいてをる一體を把捉せない、從て客觀は主觀の外に獨存するもの卽ち他在であるとせられる。固より客觀的對象としてこれを意識する故又此意識を他のものに轉ずる

だけの自由は得て來てをる。しかし何處に眼を轉じても客觀に對しての主觀であつて兩者は全然相互依存的である、主觀は客觀が實に己自身と一體である趣は識らぬ、其限定は所與的である。しかし此客觀的限定一切は畢竟意識の客觀的一面の限定であつて、意識の內容はかくの如く客觀界である。精しく言へば此客觀界は主觀にとりて內外兩樣あつて、內的所與卽ち衝動的生活一般と後者と相應する所謂外界(外的所與)とが是である。かくの如く普通の意識の內容は內外所與の世界であつて、此世界といふ內容を取り去れば主觀卽ち主人自身、所謂心といふものも其姿を消してしまうのである。故に世界といふ客觀的內容を除いては主觀もない、意識內容は元來客觀的である。今意識の此段階に於ける主觀、卽ち衝動主觀及び認識主觀と其對象とは相互依存的であるから、主觀が其對象から獨立となり得ないと同じく又對象も全く主觀に依るもので其獨立を得ない。對象界が獨立を得ないといふのは主觀外に獨立に存するものとして見られないといふのではない、實にさう見られてをる、それであるから眞に獨立を得ないのである。卽對象界全體が悉く只物の世界として存してをるので、自身を目的として自ら存するもの、卽ち一箇の自己なるものを見出さない。人の面を見人の心理現象を研究しても其は只知覺乃至認識の對象た

るに過ぎぬ、人間性（メンシュヘイト）を捉へたのではなく只人といふもの（物）を見たのである。これと交はりこれを親好しても只衝動を滿足せしめる對象に接したので他の一切のものを好惡するのと眞に相違あるのではない。自己は自我であつても他我であつてもすべて認識の對象ではなく自ら主となる作用らきによつて自ら成る。自ら主となるとは所與的限定への依存を超へる主觀の反省のことである。此作用によつて主觀が客觀に依存する卽ち客觀を外物視するといふ主觀的意識でなくなつて、客觀を自己限定とする客觀的意識となる。自己なるものはかゝる客觀的意識であるから自我の成立は同時に他我の成立である、自己は公的のものである。主觀的意識を否定したとき始て向ふに人間を見るのである、カントの謂ふ尊敬の情の如きものを始て覺える。而してそのとき始て自ら自己たるを見る。今倫理獨特の自主たるの方法は夫の客觀的意識が法の意識として實にせられるにある。法の意識は具躰的なるものであつて、某の所與的限定を某の樣式によつて更に限定する特殊的意識と直接的に連貫するものである。是は畢竟某の人格相關の意義として意識せられる事である。ヘルバルトの謂へる好意の「イデー」の立場である。所與的限定の限定、卽ち自然を素として其上に行はれる統一である、親子男女社交種族等の自然的生活の上

に實現せられる。自然的生活卽ち衝動と認識との立場にあつては意識は主觀的であつて、此方から向ふを見るばかりである、對象として見るのみである、一面的の見方で抽象的である。此方を去つて向ふの方に行つて見る、向ふになつて見る、向ふの立場からも此方を眺めて見る。是が兩面を合はせ見る具體的の立場であつて、始て双方の眞相が分かる。此方から見たばかりでなく又向ふばかりから見たのでもなく双方を統一した高い立場から翻て孰れの方をも見るとき孰れの眞相も見える。我と彼と相對した上で彼になつて見る所に彼を對象としてのみ見る主觀的意識の超越が行はれる、所與的限定の否定が行はれる。此否定から改めて双方の關係を見るのが客觀的立場の肯定、客觀的意識の統一である。子に求める所を以て父に事へる、臣に求める所を以て君に事へる、弟に求める所を以て兄に事へる、朋友に求める所を先づ吾から彼に施す、是れ實に客觀的意識の限定である、同情愛好の如き心理學的現象と嚴に區別せらるべきである。是が實に倫理獨特の實現方法である。父父たり子子たり、臣臣たり夫夫たり婦婦たりといふは倫理の特質を言ひ盡してをる。此所に實現せられるものは「父子の道」といふ意義である、客觀的價値である、此道を實にした生活は客觀的一全躰であつて父と子は故にコーエンの所謂「一全體の兩半」である。

此客觀的價値を宿どす生活を一全躰と言ふとき其生活は普遍態であることを示す。故に某の個人によつて實現せられた父子の道は此言葉の示す通り一般の父子の道である(所謂吾老を老とするは天下の老を敬する所以である。)此所に父子の關係が自然的愛情によつて結合せられるといふ主觀的意識を超えて客觀的意識の實現となる「父子の道」は法の意識の具躰的なるものである。父の慈子の孝は客觀的價値であつて、此價値の直接態は一箇の感情である。未だ抽象的たるを免れない此價値直接態が具躰的に發展して「父子の道」の體認卽ち行的知となる。此所に實にせられる一全躰は其全躰たるに於て二も無く三も無い。父子一圓の圓は其圓たるに於て万箇の圓と同一態である。故に一人の孝は万人の孝である。(瞽瞍豫を底たして天下の父子たるもの定まる。)是れ法の具躰的普遍たる所である。故に又父子一圓の圓は君臣一圓の圓と具躰的に一である(孝を移して忠となすを得る。)某の時某の場に於て實にせられる特殊の某人格相關は道德法全躰の實現である意味がある。一箇特殊の人格的關係に於て指示せられる分を通じて全自由界に入るのが道德特有の方案である。自然人某甲と自然人某乙との自然的對立に於て此對立の裏に必然的に含まれてをる一體を自知するのがあらゆる人格相關を成せしめる一躰を自知す

ることである、これ道德的自覺の普遍性である。此所に自己(自他の)が實にせられ、さきに述べた意識內容の客觀性が具體的となる、卽ち主觀的意識には物の世界對象の世界であつたものが客觀的精神の體系となつて來る。親子男女種族群居の衝動と其對象衣食住の欲求と其對象、名と力の欲求と對象等一切の內外自然界は悉く皆それ〳〵の人格相關に統一せられて無限に發展すべき義務の體系を成す。

倫理の特色は其が一面必ず某の一箇特殊的人格相關として現はれ、一面個々特殊の人格相關は決して孤立せず無限に連貫すべき人格相關の體系に屬する所にある。前者なる一面は所謂「一全體の兩半」として兩人格が俱に起ることであつて人格とは人格的關係に外ならぬ、且つ其人格的關係は必ず其時其場に特殊なるものである。道德的實在が斯く相關の上に成る一全體卽ち一圓であることは道德は己を盡すまでのものであることを示す。相手を全くする努力そのものが己を全くするのであつて一圓は彼と我と相俟つて成すのではない、相俟つならば繼ぎ合はせであつて眞の一圓を成さぬ。双方各々他のためにして各々一圓を成すのであるから實は彼は彼で一圓を成し我は我で一圓を成し、謂はゞ二つの圓を成す、さればこそ兩半が抽象的の半でなく各自一圓を完具する所の半である。相手が斯くすれば我も斯くする

といふはホッブスの說いたやうな契約、卽ち妥協又は利益交換である。倫理を成す契約ならばルソーの說いたやうな契約、卽ち主觀的の棄却の上に行はれる客觀的の實現でなければならぬ。我が權利を主張するは我がためにするにあらず我の當然爲すべきを爲すのである。權利も義務も公的のもの卽ち客觀的精神界の組織の上に起るものであつて「我の」とか「彼の」とかいふは此客觀的體系に於て占むべき地位が「我」又は「彼」に屬するをいふに過ぎぬ、このとき我も彼も客觀的(公的)のものである。權利の主張は主觀的(私的)である我を公的にせんがためであつて、權利はイエリングの論じた通り己私を棄てゝ始て徹底的に之を主張し得られる、權利と法は一である。かくの如く道德にあつては相手を責めることがあつたとしても其は畢竟自己分內のことを盡す卽ち相手を全くすることに外ならぬ、相手を全くするによつてのみ自己を全くする、此所に全くせられた自己は相手と我との統一の上に成る客觀的のものである。倫理の特色はかくの如く一々の場合に一箇特殊の人格關係を實現して此實現の裡に行はれる客觀的統一の肯定によつて主觀的意識の否定が自ら行はれるにある。欲に克つとか斷念するとかいふことは倫理に於てもあるが其はいつも或る人格相關を實にするといふ積極的肯定的なるものゝためである、宗敎に於ける

如く所謂解脱を事としない。又宗教は積極的に作用らく場合にも平等愛として現はれるから人倫の組織を起すに足らぬ。倫理は其場に於ける獨特の人格關係を起す。父にあつては慈子にあつては孝、上にあつては仁、下にあつては敬朋友にあつては信である。又親族は親族他人は他人、決して同等には遇せぬ、我國には忠、人の國には人道正義の類である。又官民は相對する、師弟は相對する、醫と患者、辯護士と被辯護者、或は資本家と勞働者、債權者と債務者と相對する。此等皆悉く特殊獨一の對立であつて、此對立を支持するものは其裏に於ける特殊獨一の一躰である、此一躰が夫の倫理的組織を成すそれ〴〵の特殊の一全體である。相對するは必然相一致することである、相對するものは互に他に賴つて己を維持してをる、此相互維持が卽ち一體である。相對する者は相爭ふべからずして相和すべきである。他を斃した時は己もまた滅ぶ時である。道德法の實現は悉く皆かゝる個々特殊の人格的の對立卽一躰ならざるはない。種々の職を營む作用らきの裡に實にせられる人間性は平等であるが職に上下貴賤の別あるは否むことが出來ぬ。此別と夫の平等と相依つて倫理を成す、若し只差別のみ若しくは平等のみならば等しく社會を破壞する。道德的平等は具躰的平等であつて抽象的ではない。所謂手が頭を防禦すとも手の恥辱

ではない、全身體から見て手と頭は平等でもあれば貴賤の別もある。平等の人格が個人に屬すること恰も堅さが石に屬する如きわけではなく、人格とは上下相位し貴賤相序する躰系の上に起る客觀的一全體である、卽ち人格的關係である。此それぞれ特殊的なる人格關係は更に又其時其場に於て特殊的なる關係を實現する。卽ち親子の關係にあつても所謂人の親の頭ははらるとも我が親の頭ははらさぬやうにする、人も亦自分の親のためにさうするのである。二人の生命を全くするを得ないときは己むを得ず先づ我が親を救ふ。喪には悲む、祭には敬する。同じく父の慈であつても賢なる子は愛する、不肖の子は憐む。其時に臨み其場に際して必然にして易ふべからず奪ふべからざる特殊の人格的關係が創造せられる、前以つて豫測すべからざるものがある。フイヒテの言へる如く道德實現の極致に達するまでの道行きたる義務の系列は寸毫も變更すべからざるものである、義務に合ふ行爲は睿知界の本來（Intelligibles „An sich“）である。シジヰツクは宇宙的見地からは如何なる人の幸福も他の如何なる人の幸福よりも重いといふことが無いと言つてをるが、此所の幸福を人々各自の快感であるとすれば、是は抽象的平等のみを見たのである。又シジヰツクは宇宙的見地とは卽ち理性の立場であるとしてをるが、實踐的理性に於

ては宇宙的見地といふものは人々の遭遇する個々特殊の社會的生活關係の裡に內在する具躰的普遍であつて、此等關係を離れた宇宙的見地ならば道德に用は無いのである。又全體の幸福を眼中にをくが同じく理性の立場であるとしてをるが、全體とは總數を意味すとせば、これ又理性が意味する全體ではない、善惡は數量上の算の上に決せられるを俟つものでない、其場に臨んで避くべからざる唯一の道が現前するのである。

倫理の特色がかく其時々の唯一特殊の人格相關として現はれるにあることは、他の一面唯一的相關なるが故に孤立せずして却て無限に連貫發展すべき人格的關係の躰系に屬することを示してをる。孤立した道德的命令は無い。道德的生活は種々の德目の集合では無い。道德は意識の具體的實現である。主觀的意識の主觀の對象は內的所與卽ち衝動的生活と外的所與卽ち外界とであつて、此內外界は相互依存的である所に兩界の根柢的一體が指示せられてをる、此一體を知ることによつて意識は客觀的となる、衝動は意志にまで統一せられる。意志は夫の內外界相應の裏に橫はる所の根柢たる客觀的意義によつて兩界を合一する所に成る。客觀的意義とはたとへば男女の理である、此理が根柢となつて內に男女的衝動があり外に之に

應ずる男女がある。此理に還つて見れば男女は男女的衝動を滿足せしむべき外の對象では無くなつて、其所に內外を一にした男女の理の自全的流行がある、欲求の如く外に對象を追はずして己自身を目的とするのが意志的統一である。實在的順序によつて言へば一層具體的である客觀的意識が一層抽象的である主觀的意識よりも根本的であるから道德が自然の根柢である。自然法によつて統一せられをる自然界の必然は故に道德から見れば偶然である。然れども既に一が他の根柢であるから兩者は根本に於て一である。故に道德は自然界の偶然性によつて左右せられないにも拘はらず經驗的にはいつも自然を其素材とするものであつて、曾て自然的素地を離れない。實踐的理性の統一は自然的限定を更に限定する所にあつて、此處に自然を超越するのではあるが、此限定の形式たる夫の客觀的意義は實踐的理性の必然的內容であつて任意的創造ではない。道德的自由は卽ち道德的必然である、自由主觀への必然的要求として客觀的意義が臨んで來る。主客の絕對的一體たる絕對者の絕對的自己限定は認識主觀には自然的必然として道德主觀には道德的必然として現はれて來る。故に道德は自然的限定を超越はしても自然の內容の一つをも造ることは出來ぬ、一物の末も一念の微も生むを得ず殺すを得ず只之を轉化し得

るのみである。主觀の自由は自然的限定の特殊性を超越はしても其を變更し沒却することは出來ぬ。却て此特殊性の本來の意義が夫の自由主觀には當さに實現せらるべき客觀として、要求せられた目的として現はれて來る。故に草木鳥獸の種別、山河國土の形勢、民族の生理的及心理的特質等は絕對より來る意識の本源的限定であつて、道德は此等に司配せられず此等を司配する所に成るのであるが、司配するとは此等限定の自然的偶然を脫して其本來の意義によつて更に限定することである。卽ち所謂各々其所を得しめ其生を遂げしめる其個性特色を發せしめることである。只主觀客觀の具躰的合一を離れんとする抽象的主觀の空想には此等自然的特質を無視することが出來るやうに見えるのである。道德的關係は皆自然的生活の上に實現せられる。職業の如きは父子夫婦兄弟の道德の如く直接に自然の上には起らぬが自然に起因せざるものはない。倫理學に於て自然主義說の出づる謂はれがある。道德は實に自然を文飾したものと謂ふも可である、或は自然が其本來に還へるのが道德である。自然的生活として與へられたものは洩らさず之を統一するのでなければ道德は成らぬ、これ其が藝術と違ふ點である。心の中に邪魔になる欲情があるからとて之を放棄してをいては道德的修養は成らぬ、社會に惡人が居るからと

て之を閉却し又は片端から殺してしまつては社會を道德的に組織したとは謂はれぬ。社會は猶抽象的たる所を免れぬから少數の惡人は之を除くの道を取つて、彼等をも善に化するまでには達し得ない。學校は猶更抽象的であるから容れるにも卒はらしめるにも多くの取捨を施す。しかし具體的統一の立場に立つ父は如何なる子をも之を容れ之を化せんとして已むことを知らぬのである、是れ家族の道德化である。これと同じく民族は其成員の最後の一人に至るまで之を携へて民族的國家の組織内に收めんとする、若し落伍者を出せばそれだけ民族的精神を傷ける所がある。これと同じく愛の神は惡魔をも和らげ化する、若し能はねば愛の神たるを失ふ。群類の祖としては天は萬物各々其所を得其生を遂げるやうにする、是れ廣大を極め且つ精微を盡した最具體的の統一である、此所には自然と道德とは全然一でなければならぬ、此所は眼前の大自然を指すのではない、理念が永遠に現實である世界のことである、吾人から見れば無限に發展すべき人格相關の世界である。

自然は一足飛をせぬといふことは只自然法的統一を以ての故で然るのでなく、實在の連續性が其眞の根據でなければならぬ。物理學で云ふ作用と反作用は等しくして且つ反對であるといふ如きことも畢竟一新統一の行はれること卽ち創造を意

味するので、あらゆる作用は悉く不息的創造の一面ならざるはない。抽象は思惟の上に行はれるので、自然の根抵自身は却て連續的である、此連續性が道德の實現によつて具體的となる。具體的となるとは一箇の人格相關は自餘と俱に起ること及び繼起的にはここに始て眞の歴史を成すことである。俱に起るとは道德は片端から一部分づゝ實現せられて其が集つて全躰を成すといふ如きものでないことを云ふ。先づ身修つて然る后家齋ひ、家から國に及ぶといふは只一面からのもので、反對から言へば治國平天下といふ文化的組織の中なればこそ修身の道が敎として存するのである。蠻野の中に某の一個人が身を修めるといふはあり得べからざるもである。父子夫婦の道行はれて家が齋ふことそれ自身が一般的敎化の流布を語つてをる。夫婦あつてから父子があり、父子あつてから君臣ありとは假りに抽象的に言つたに過ぎぬ、自然の立場からでも男女あつて子孫あり而して集つて民族を成すのではない、民族の中に男女がある。特に道德の立場からは君臣あつて然る後に父子夫婦あるのである。君臣とは上下の制、治者被治者の對立をいふ、卽ち法度典則が立つので生物的の男女親子は所謂夫婦父子を成す。生物的の民族が國家的組織を起すといふ全體的實現の部分的顯現として男女は夫婦を成し群居は朋友の道を成す。一人格

は一箇の人格相關の上に成る如くに一箇の人格相關は無限なる人格相關の發展の裡にのみ成る。舜法を天下に爲して夷を變じて華となすといふは漢民族の自覺のことである禮樂刑政はヘーゲルの言へる民族の自覺である卽ち民族的精神の自己組織である。君に忠といふは必ずしも某個人のために心を盡すといふにあらず、そうするのは畢竟民族自覺の本原に遠ざかるまいとする努力卽ち民族的精神への不斷の反省である。身を修めるとは此精神的組織に參與すると、卽ち又後者を維持し發展せしめることである、故に修身は治國平天下を致すので、斯く全體と部分は循環するのである。法度典則は斯く客觀的精神の出現したことであつて主觀的意識の所產でない、主觀的意識は自己を否定して始て法則を知る。所謂私意一關を經ざれば德に入らず、德に入らざれば法度典則何を以て知らん(陸象山)とはこのことである。故に又法度典則の裡に自然人は文化人たり得るのである、法度が人を道德に導くのである。是れ實に國恩の深い意味である。ルソーの社會契約といふは普遍的意志實現の形式のことである、卽ち衆人の個人的意志の一致のことではなく、衆人が各々其個人意志を除す所無く棄却した所に新に起る客觀的意志である、此後者の組織的發展が卽ち法である、而して後者に與るによつて本能は正義に自然的自由は市民的

卽ち道德的自由に轉ずると論じてをる。國の法は總個人の同意によつて成るもの、從て總個人の福利を維持し增進する規則であると見るは只外面的統一の見地である。民族生活の實在的連續性を自然法的統一の形に於て現はすのと相應する。物理的作用も其實は自由的創造であるのを動と反動は等しくして且つ反對なりといふ如き概括によつて說く如く、其實は個人的意志の否定の上に實現せられた客觀的精神の組織たる法を衆個人の合意の上に成り衆人の個人的意志を滿足せしめる規約と見るのである、卽ち典則法度を眞に知らざるのである。法は自然的自由の否定の上に起る客觀的統一であるから却つて自然的要求を精神的要求の形に高めて保つものである。たとへば法によつて生命財產自由の保護せられるは個人的欲求にそれ〴〵滿足を與へるといふ意味ではなく人格的關係を成すべき直接的要素としてゞある。すべて利用厚生の道卽ち經濟の學は法の統一を豫想してをる、而して法が維持するのは悉く客觀的卽ち精神的のものであつて、單なる欲求の滿足は其與り知る所ではない。衣食足つて禮節を知るのは敎を豫想してをるからである。衣食の充足が禮節を生むこと土田が草を生ずる如しとなせば自然的發生と精神的實現とを混同する。

只所謂欲を除へて欲を濟すが禮の作用である、法は自然の否定の上に精神の形に於て自然を肯定する。斯る最も具體的卽ち全然的統一によつて自由界に入るのが倫理獨特の方法であつて、此統一は卽ち法度典則の成立である。國家に於てのみ人は始て人間となるといふ古代ギリシヤの思想は是である。一個人の業として價値ある事も國家に於てとして見れば更に遙に大なる價値があるとアリストテレスの言へる深い意味はこゝにある。アリストテレスの倫理學は其國家學(ポリチックス)の一面であつて、其國家とは社會的生活の道德的組織卽ちプラトーの謂ふ正義の建立卽ち理想國のことである。自由とか優美なる感情とかすべて人間的價値あるものは只客觀的精神の實現の裡に起るのであつて、個人獨自の所產であり得ない。眞の藝術の發達の如きも國法禮俗を豫想せねばならぬ。

以上の如く一箇人格相關が全體的人格相關卽ち無限に發展すべき人格體系と俱に起ることは自然の根抵たる實在的連續性が道德に於て具體的となるを示すのであるが、このことは同時に道德に於て始て眞の歷史が成ることに當る。生物學を從前は自然史(ナチュラルヒストリ)と謂つたのは生物には物理現象と異にして種の連續があるからであると思ふ。生物に種の連續のあることは道德から見て重大な意味があるが、個體とし

ては生物はすべて生滅するから具體的に活きた連續を見ることは出來ぬ。只自覺せられた意義の一卷に於て眞の連續が實にせられる。而して是は只客觀的精神の實現に於てのみ見る所である。主觀的意識に於て欲望の滿足の如きは只其場に起つて其場に滅するもので、幾度欲を充たしたからとて人格の內容に毫も資するとはない、否未だ一貫した人格が現はれてをらぬ。或は大事業を成しても只それだけならば當人には過去の夢である、記憶に由る連續は活きたるものでない。或は多少の道德的感慨を懷いて來ても只それだけならば除夜に際して空しく歎する種となるに過ぎぬ、シユライエルマヘルの所謂人生の岸に立つて徒らに悲むのである。或は學術に從事して發明發見する所があつても、其學術其自身は永遠の意味は有つてをつても、其人は只其永遠なるものゝ道具であつたゞけで自ら其の主となつたのではない。只個人的意識を超越する所の客觀的意義を以て自己の生活を直接的に統一する原理となすものに眞の連續卽ち歷史がある。此意義に直接に活きるものは個人存在の起滅を打ち通して一貫せる客觀的精神に仲間入りをする。精神のみが具體的の連續性卽ち歷史を有つ。此精神界に於ける自己の職分を知るによつて夫の事業も學術的研究等も人格の統一に入り來る、歷史を成す、否此歷史的統一によつて

さうでなかつたとは異つた形を事業も研究も取つたであらう。只自己の使命を信ずるものにあつて其學問事業が眞に其人のものとなり其人の歴史を成す。藝術の作は自全の世界を成し、宗教の境涯は一切を超出するのであらうが、文化の要素としては歴史に屬し、藝術家宗教家とは社會の道德的組織に於ける職分の名である　藝術の作そのもの宗教の境涯そのものは歴史的統一を超出して直接に絶對的精神の現はれであるとしても、具體的には客觀的精神の統一に屬し又後者の裡に於てのみ發達するものである。歴史を離れて如何なる藝術家も宗教家も出ようがない。藝術の形式は普遍的自由であつても其内容は最も著るしく國民的特色を有つ。宗教は、民族傳來的宗教（ナショナル・レリギオン）の如く民族の道德的歴史的生活と具體的に一であるものは別として、殆ど超國民的であるやうであるが、しかし尙ほ具體的の形に於ては特色を有つ。其特色は歴史と連貫する。

三

客觀的意義を以て自己生活を直接的に統一する原理となすものに始て歴史がある。故に客觀的意義自身こそ最も統一的なるものであつて、諸の意義の集合羅列と

いふは自家撞着である。故に人類の歴史あつて始て一國民の歴史あるべく、一國民の歴史あつて始て一人格の歴史あるべきである。故に國家は地上に於ける神の顯現であるとは實に深く言つたものである。個人がこれに與かることによつて始めて歴史の中に入るといふ夫の客觀的意義は自由主觀の任意的創造ではなく主觀が自由となると共に當に實現せらるべきものとして現前する客觀であつて、實に主客一體の深い所から起るのである。客觀的意識が實在的には主觀的意識の根柢である以上民族の自然的生活が如何なる偶然的事情に左右せられ如何なる運命に遭遇しても其實在的根柢は客觀的なる民族的精神でなければならぬ。自然史としての民族の種は自然的自由の發現たる生存競爭によつて或は滅ぶことがあつても、一度民族の自覺によつて立てられた民族的精神は謂はゞ實在界の本土に還つたもので、卽ち世界史の裡に永遠に意義を留めるものでなければならぬ。此民族的精神は精神なるが故に時々刻々の斷えざる自己活動によつて活きるもの卽ち其特殊性を特するものであつて、民族の自然的生質に委かせて存立し得べきものではない。個人を歴史に與からしめる客觀的意義は卽ち此民族的精神の特殊性そのものである。客觀的意義は主觀的意識の抽象的思想卽ち人爲的思量によつて設けられた團體或は

自然的偶然性に左右せられて起つた集合が標榜する所の主義とか精神とかいふ主觀的のものではない。却て人爲を超越した主客一體の客觀的精神である、己むを得ざる民族の魂である。單なる經濟的利害の計較思量を中心として集れる衆個人の外面的組織の如きものゝ裡にはかゝる魂かゝる客觀的意義は出來ない。魂とか意義とかいふは出來るものでなく其自身永久的でなければならぬ。道德獨特の實現方法は人格的關係の成立にあつて、人格的關係の成立は諸の人格的關係の體系を豫想する、後者は卽ち法度典則である、卽ち又國家組織である、此後者は其要素たる諸の人格相關に於て見える所のそれ〴〵の意義卽ち價値を統一すべき一大意義を以て存立する外無い。此統一的意義の客觀性は其が常識の所謂大自然の所產であつて人爲でない所の民族の根柢たる民族的精神である所にある。故に經驗的事實は如何樣であつても國家の理想は民族的國家にある、民族が國家を組織する事が其自覺である。自然的生活として個人が民族の裡に生れて又其中に死する如く、個人は民族的精神の發現たる民族的國家の組織に與かるによつて人格界に入る事が出來る。實に個人は自己の國民的國家によつて人間性を得る。此民族の歷史を通じて個人は人道を敎へられ所謂世界史にも參はる事が出來る。それで始めて道德の具體性

が明確になる卽ち民族的精神が抱く所の理想卽ち其歷史を一貫する意義によつて統一せられて始て夫の諸の人格的關係が示す所の諸の意義が意義の集合でなくして眞の意義たる實を有つことが出來る。具體的の道德卽ち眞の道德は必然的に國民的道德でなければならぬ。一箇の人格的相關は人格的關係なるの故を以て客觀性卽ち普遍性を有つ、從て其所に實にせられる意義(卽ち人格的價値)は形式に於ては獨立であり絕對である、たとへば父の慈子の孝朋友の信の如きは感情としての直接態にあつて實に其自身の內實的價値を親しく覺えるのであらう。然るに形式上いづれの人格的關係もかく普遍的であることが其內容のそれ〴〵特殊的であるに拘らず互に相通じて一全體として體系を成し得る所以である。互に相通ずるとは朋友の信を職に移せば職に忠となり職に忠を子に移せば父の慈となる類である。此等の道德的意義卽ち價値が內面的にかく互に相通ずるとしても一全體を成すのでなければ統一點を得ずして意義の集合卽ち無意義に了らねばならぬ。一全體を成すには其全體としての具體的の一意義が作用らかねばならぬ、此後者なる一意義が誠の意義の發現たる誠の人格的關係を統一して一體系を成し、始めて各をして眞に意義あらしめる。さきに述べた一々の人格的關係に於て覺えられる絕對的價値とい

ふも實はかゝる全體を背後に抱いてをるわけである。此統一的一意義はそれ〴〵の民族にあつて其民族的精神卽ち其民族的生活をして歷史たらしめる一貫の意義である。後者によつて統一せられて諸の道德的關係が精神的有機體を成す、卽ち國民的道德である。而して始めて道德が德目の集合でなく活きたものとなり、從つて個性的色彩を得て來る。一つ一つに離して見れば勇、智、正義、節制等の德は何處も同じい、虛言を吐かぬとか、職務に忠實とか、親子夫婦の道德とか皆等しく人間の道である。しかし吾人の道德的生活は此等諸德諸義務の寄せ集めでない。此等が各々特殊的である具體的一全體の要素となつて活きて來る。このとき此等の德目そのものに右の全體的統一から受けた特色が出來る、否初からかゝる特色を有つてをるのである。儒敎で言ふ人倫五常は各、獨立なる親義別序信の集合ではない。五常が一全體として儒敎道德が活きてをる。若し後者を漢民族の國民的道德と見做せば、此民族にとつては五常卽道德道德卽五常である、此以外に附加せねばならぬ德目はない、虛言する勿れといふも其職に忠なれといふも皆五常の中に籠つてをる。我民族の歷史的精神を國祖に順なるにあるとせば我にあつては忠孝卽道德、道卽忠孝である。忠孝は二德目の結合ではなく全道德である、それで道德が眞に活きるわけである。忠

孝であるものは虚言を吐かぬ、夫婦相和する、職に忠實である、勇があり、節制がある。若し此具體的全體を離れんか諸の德は其力を失ふのである。信實を敎へるのも忠孝の敎そのものである、若し忠孝だけでは足らぬから虚言を吐かぬとか社會奉仕とかを別に補足して敎へるといふならば道德は支離する、いづれも皆忠孝の發展でなければならぬ、具體的道德は發展すべき生命であつて固定した昔日の德目の名でない。道德的言葉は道德的生命の發展につれて發展して新なるものが出來るが、しかし其は其國民特有のものとして起るべきで外國の道德的言葉の反譯であるを好まぬ。實に道德的言葉は他の方面の言葉にも增して國民的特色を帶びる、ドイツの道德書に見える夥しき德又は義務の言葉を我邦語に譯するすべの殆どないことは學術上の言葉の比ではなからう。是れ又道德が國民道德であることを語る。若し又功利說を單に個人的思想家の說でなく英國人の國民的道德思想の反映であるとせば、公衆の幸福 (Public welfare) 或は公共善 (Common Good) といふは只の言葉でなく、彼等の社會を道德的に統一する中心的意義でなければならぬ。從て信實 (veracity) の如きも男女の貞潔 (purity) の如きも public welfare に連貫して十全なる意味を得て來る。勇、節制、正義、慈惠等の諸德を其等が公衆の幸福に寄與する所に始めて道德的意義を得

るもの卽ち具體的に行爲の善惡を定める標準となるものであると功利論者が論ずるのを單に抽象的理論として見れば牽强附會と思はれるが、彼國民が實地に正義を展み慈惠を行ふ際に其司配的精神となるものは public welfare といふ如き言葉で表はされる或る意義であるのであらう。しかも其公衆の福利といふ言葉は抽象的には人類一般に當つても實行的に力ある意味としては英國の社會に嵌められてをるではなからうか。若し如上に解したならば功利說が有意義のものとなつて來て、吾等他國人が單に理論として評し去る如きものでないのであらう。翻て彼等が我忠孝の說を單に抽象的に解して、偏したものと思ふも謂はれあることである。

道德は體系的發展であつて其體系の精神たる特殊の統一的意義によつて諸德は具體的に統一せられるとせば從て諸德自身も其體系の異なるにつれて特殊性を有つべきであり、又は諸德相互の輕重を異にするわけである。米國人が道德の事とし言いへばいつも正義とか平等とか自由とか言ふ此等の外に彼等には道德なきが如くである。忠孝節義の然るが如くに人道博愛も又一流の國民道德ではなからうか。同じく夫婦の道德であつても一は夫婦愛ありとし、一は夫婦別ありと敎へる。同じく一身を持するにも獨立自尊ともいひ恭儉己を持するともいふ。民は重く社稷之

に次ぎ君は輕しとなすもあり、君は重く臣は輕しとするもある。孝を主眼とするあり、虛言なきを主とするもある。此等を抽象的理論によつて矛盾なきやうに統一することは殆ど不可能の如くであるがそれ〴〵特殊の中心的意義によつて具體的體系に屬するとして見れば自ら別意義を得て來るではなからうか。

民族的生活を歷史的たらしめる一貫の意義卽ち其民族的精神は國民的道德として現はれ後者が國民的生活の最具體的統一であつて、其政治法律の如き實に國民的道德の一面でなければならぬ。典則法度は實に道德的組織に外ならぬ。此國民道德が實にしつゝある客觀的意義はあらゆる意義の統一界たる觀念界に於て其民族的精神が占める特殊の地位と見るべきである。有限者が絕對者に直接する面に無限の接觸面があつて、一有限者が接する一接觸面が其者の存在の最上の意義であり、而して其は其者の眞の個性であるといふシユライエルマヘルの意を借れば、國民道德に實にせられる意義は其民族が直接天から授けられた存在根據である。實に諸の民族は其國民道德の典範をいろ〳〵の形に於て神授として寫象してをる、而してこのとき其國民道德は直に其民族的宗敎と連續してをる。國民道德と一である所が民族傳來的宗敎の一特色であつて、自然的連續を超越して種々の民族の中に入る

宗教が道德超越の絕對性を著しるく有つのと趣を異にする、而して是又たま〳〵道德は國民道德であることの一側面を示してをる。直接天から授けられるとは意識の最直接的統一卽ち純粹意識に達する或は還ることである、卽ち理念界に到ることである。意識は信であるから純粹意識は信の純なるもの卽ち誠である。あらゆる抽象卽ち人爲を打ち通して始めて天に直接する、此所が卽ち個性である。個性は誠である、理念界は意義の最終統一界卽ち眞の個性の世界である。國民の精神とは國民の誠卽ち國民的個性であつて、此國民の個性的生活を最も具體的に實にするものが國民道德である。此國民道德の裡に、其を成す要素として、個人が其誠實によつて各々其個人的個性を發する。個人が眞實であれば益々國民的個性を其普遍相として帶び、國民的個性は其成員たる個人のさまざまの個性の統一體として自己を實にする。道德法の意識が具體的であるとは個人が國民的個性を通じて自己の個性を其時其場に於ける唯一無二の行爲として實現せんとするとき其行爲をしかく限定する所の具體的意義として右の意識が作用らくことをいふのである。(完)